

2007年1～2月掲載分

十勝 高田 嶺鳥  
こんな夜は寝酒に限る独り言  
増長の木枯し諫めるすべ持たず  
北吹くや黒一色の通学生  
忘却をとがむむるなかれ冬銀河  
誰しもが深雪諾なふ十勝かな

さいたま 宮崎 美智子  
白鳥の王者のやうに眠りをり  
明治座へ泣き笑ひつつ年忘  
山茶花を啄み鳥語にぎはしく  
ほうとうを汗して食ぶる冬の屋  
聖夜の灯弥増すばかり街街に

習志野 大慈弥 爽子  
松過ぎの海光藍を深めたる  
みみづくの瞑想風をふくらます  
梅さぐる目のこはばってしまひたる  
水音にひときは春を待つひびき  
何色といへず春めく色といふ

藤沢 藤田 富子  
橋の影落す水面にもみぢ散る  
木枯しの玻璃打つ音に目覚めけり  
顔見世やまねき掲げて中村座  
冬日浴び帆を休めゐる日本丸  
一陣の風に落葉の吹溜る

町田 小森 まさ彦  
松守る縄を照らせる冬日かな  
西塔に初日の夕日沈みゆく  
野仏に鏡餅置く古都なれば  
天平の屋根の端より昇初日影  
どこからか呼ぶ声ありて春隣

昭島 しもだ・たかし  
鮫鱈の歯だけ残れる浜辺かな  
子鯨の目つむり腐臭すでにして  
冬空や月の骸のかかるのも  
犬放ち千鳥と遊ぶ心なく  
冬怒濤連れの女は山育ち

相模原 西澤 桃園  
健脚の証左七福神巡る  
注連飾してゐる僧の紅襷  
風光りせせらぎ光りをりにけり  
白砂を雪に見立てて福寿草  
腹太き尊者もおはす寒詣

2007年3～4月掲載分

習志野 大慈弥 爽子  
にじむ色ふくらむ艶に森の春  
囀の隙なく風のこちよく  
どの道も水辺へ通ふ花の坂  
灯に揺れるかげをよせ合ふ紙雛  
惜春の歩に森の香の沁み透る

十勝 高田 嶺鳥  
雪少な秋蒔き小麦案ず村  
ほどほどに雪降る北の国が好き  
電気毛布使はず過ごすつもりなり  
日脚伸ぶことを静かに云はれけり  
推敲の座五におく春遠からじ

藤沢 藤田 富子  
春浅し地底に鯉のみじろがず  
馬手(めて)に海弓手に山や春の旅  
底冷えの祠におはず仏達  
観音の御慈悲賜る四温晴  
厨ごと手早く済ませ毛糸編む

町田 小森 まさ彦  
春昼や携帯する人眠る人  
時重ね日差し重ねて沈丁花  
叡山を湖に浮かべる棚霞  
凍返る真青の空の中に富士  
糸遊に富士を揺らせる力あり

さいたま 宮崎 美智子  
梅見茶屋すすめ上手の土産買ふ  
畦の芹色出でにけり香の未だ  
雪晒し私の好みの帯の柄  
野火煙人の動きのゆるやかに  
コアラ舎に人集ひをり春の昼

昭島 しもだ・たかし  
接骨木の芽にはやあぶら虫蝟集  
わが宿をめぐれる蔦の芽の遅速  
青饅を入るる深めの赤絵鉢  
芥菜の辛さを好む齢かな  
たんぽぽの咲くよと寄ればはや絮に

## 2007年5～6月掲載分

習志野 大慈彌 爽子  
五月晴いたずらっ子の目がひかる  
なにか出てきさうな蛍袋かな  
雨蛙葉になりきってをりにけり  
緋目高の孵化まなこよりはじまれる  
差し潮に水母のびたりちぢんだり

横浜 下島 緑  
散り終えし桜は山に紛れけり  
風が解き風が又組む花筏  
短夜の短き夢に母に逢う  
短夜は海から空けて旅の宿  
魚島の沖より風の膨らみ来

さいたま 宮崎 美智子  
大和蛭眼を病む友を思ひおり  
芽吹き初む女坂ゆきあやまたず  
群をなす地をすれすれにつばくらめ  
忙はしげに見回す川鶺潜りけり  
桜草荒川堤へ歩み入る

十勝 高田 壱鳥  
仙台へ佛事に発つや春の朝  
うぐひすの一声納骨すみにけり  
永き日やペットの亀も留守仲間  
百ヶ日まで雑事あり春灯  
明日は辞す子の家にての春夜かな

藤沢 藤田 富子  
そこはかたなく沈丁のただよふ香  
空に向き日を集めをり花辛夷  
明るさや木々の芽吹きの盛んなる  
藤房やうすむらさきの風となり  
江の島の屋台の栄螺焼く匂ひ

町田 小森まさ彦  
富士見ゆる峰にあるものみな五月  
芝抜ける文字摺草の高さかな  
新しき世を確かめて樟葉落つ  
男気の道に溢れて三社祭  
母も子も粋が大事と神田祭

## 2007年7～8月掲載分

さいたま 宮崎 美智子  
児を抱くように鷺草抱へ来る  
遠花火一人ホームに眺めけり  
帰省してさんさ時雨の音頭聞く  
土地っ子の美味き瓜としてつられ買ふ  
駅の灯へかなぶん羽音荒々し

習志野 大慈彌 爽子  
水音をまとひ残暑をのがれをり  
鱗雲たそがれ色に崩れ来し  
のぼり来し丘に九月の風の色  
秋の夜の風となりゆく胡弓の音  
鈴の音を吸い上げて秋高くなる

藤沢 藤田 富子  
夏風邪に気怠き日々の厨ごと  
病癒えて大成田屋の夏芝居  
藍浴衣ももっとも浴衣らしきかな  
端居するかすかな風をたのみとし  
雷鳴に身のすくむほど玻璃ひびく

町田 小森まさ彦  
ポンポイントドントと音夏惜しむ  
酷暑日の西に向きたる汀子句碑  
女踊りの汗降る位置で見る踊り  
低き空にスターマインらしき火の見へて  
海霧に立つ函館山の迎へくれ

昭島 しもだ・たかし  
松葉牡丹赤彦も詠みわれも詠む  
コーヒーカップ換へ意気あらた涼あらた  
青淵の巖頭に立ち涼あらた  
青淵に泳ぎて夏を惜しみけり  
まだ花のある菱の実を採りにけり

横浜 下島 緑  
引き潮の砂浜ひろし日の盛り  
明日帰る人と見ている土用波  
森越しに灯りさざめく避暑の家  
かなかなや一村山の影に入る  
ははそはの母独り言つ白槿

相模原 西澤 桃園  
崩されるための砂山磯遊び  
腕白に岩の船虫逃げ惑ふ  
磯蟹を素手で捕ふる勇気かな  
潮浴や波のうねりに身をまかせ  
日に焼けて人相少し悪くなり

2007年9～10月掲載分

相模原 西澤 桃園  
草田男の碑にちらほらと降る木の葉  
芭蕉句碑牧水歌碑に降る木の葉  
凍蝶の時空を止めて化石めく  
冬紅葉どっと散らして猿の飛ぶ  
空風に彩廟光る港町

横浜 下島 緑  
秋天へ飛騨からくりの鉦太鼓  
どこまでも飛騨路は秋の川に沿ひ  
土地ことば覚えて真似てきのご狩り  
竹伐って鶏小屋近くなりけり  
灯点して熊野末社の神迎

十勝 高田 峙鳥  
括り萩明日は手術の師を思ふ  
秋澄むや貧しき詩情かき立てて  
どぶろくや旅愁いよよに草の宿  
むく群れて暮るゝ武蔵野山遠く  
踏み入りて粧ふ山と覚へけり

さいたま 宮崎 美智子  
イギリスへ発つ旅鞆秋灯下  
ヒース枯れ嵐が丘のはるかなる  
冬の川ロンドン塔の歴史聞く  
初冬のシエクスピアの生家訪ふ  
宮殿(バッキンガム)へ戻る騎馬隊冬衣服

藤沢 藤田 富子  
秋簾句談義に花咲かせけり  
新米につつがなき身をよろこべり  
里の秋はざ木かけ見るなつかしさ  
秋灯下書に親しめぬ目の老化  
秋霖や訪ふ人もなく人恋ふる

町田 小森 まさ彦  
白露の棄田は広し空青し  
穠田の色の濃淡越平野  
夕紅葉ヘッドライトの円の中  
国境のトンネル出て初時雨  
秋の日も視線も有りて野天の湯

2007年11～12月掲載分

相模原 西澤 桃園  
草田男の碑にちらほらと降る木の葉  
芭蕉句碑牧水歌碑に降る木の葉  
凍蝶の時空を止めて化石めく  
冬紅葉どっと散らして猿の飛ぶ  
空風に彩廟光る港町

横浜 下島 緑  
秋天へ飛騨からくりの鉦太鼓  
どこまでも飛騨路は秋の川に沿ひ  
土地ことば覚えて真似てきのご狩り  
竹伐って鶏小屋近くなりけり  
灯点して熊野末社の神迎

十勝 高田 峙鳥  
寒菊や母百一歳を越え給ふ  
厨よりいずし漬け込む酢の匂ふ  
いずし漬食べる家族の居るうちは  
漬け込んで一月寝かす飯ずしかな  
逆さ押しいずし世に出る儀式かな

藤沢 藤田 富子  
吟行に四苦八苦して年忘れ  
加齢てふ言葉医師よりそれぞれ寒  
争ひかたはむれか鶉の姦しく  
鎌倉の老樹の黄葉日に映へて  
下り来て今美しき溪紅葉

さいたま 宮崎 美智子  
冬晴の港を包む汽笛かな  
冬の菊雪と見紛ふひとところ  
羽子板市威勢にまけて買ひにけり  
大屋根の空の青さや虎落笛  
冬薔薇に色の深みの出でにけり

町田 小森 まさ彦  
帰国あり渡米もありて師走中  
一閒さん横にはなれぬ路地小春  
掃いてまたまた掃く人に降る落ち葉  
冬の月ソース焼ける香で待ち合わす  
枯れつくす多摩横山の日向かな